

塾員山脈

笙奏者・作曲家

東野珠実 君

【とうの　たまみ】
群馬県高崎市生まれ。高校卒業後、国立音楽大学作曲学科に進み首席卒業。1998年政策・メディア研究科修士課程修了。1989年より笙奏者として国立劇場公演に参加。リサイタルシリーズ「笙宇宙」公演をはじめ、国内外で演奏活動を行っている。作曲家として2001年国立劇場作曲コンクール1位「星筐」、国立劇場委嘱作品「月香楽〜月しろ〜」など作品多数。Yo-Yo MA Silk Road Projectから招聘を受けるほか、2011年には坂本龍一プロデュース、雅楽古典曲「調子」を世界で初めて全曲録音した笙のCD「Breathing Media 〜調子〜」を発表。2児の母。

雅楽器・笙（しょう）の演奏者
作曲家としても世界的に活躍
幼い頃からの人生の目的は「創造すること」

笙や龍笛（りゅうてき）、篳篥（ひちりき）で奏でる雅楽は日本人の音楽のルーツ

――笙は、龍笛や篳篥などとともに雅楽で用いられる楽器です。管楽器の一種ですが、その形状はフルートやトランペットなどと大きく異なり、17本の細い竹管を円形に束ねたような形をしています。竹管には金属のリードが付いていて、吹き口に息を吐いたり吸ったりしてリードを振動させ、その振動が竹管と共鳴し、まるで天から響いてくるような妙なる音楽を奏でます。

東野珠実さんは、その笙の奏者であると同時に現代雅楽の作曲家。また、雅楽とは対極にあると思われるコンピュータミュージックの作曲家でもあります。国立音楽大学作曲学科卒業後、義塾の政策・メディア研究科修士課程を修了しました。

雅楽器の奏者というと、雅楽に関わる家に生まれた人がなるという印象があるのですが、東野さんの雅楽との関わりを教えてください。

東野　私は雅楽にはまったく縁のない家に生まれました。ただ、幼い頃から「何かを創造する」ということに強い興味を持っていたようです。3歳からピアノを始めたこともあって、その創造意欲は音

楽を通じて発揮され、4歳の頃には生まれたばかりの弟に自作の子守唄を歌って聴かせていました（笑）。私が通った高崎市の小学校は、創意工夫と自主性を重んじる進歩的な学校で、その方針のもと、私は3年生のときに学級歌を作曲し、毎日の朝礼時にクラスメイトと歌っていました。その後、作曲家を目指すようになるのですが、もし絵が得意なら画家になっていたかもしれません。

雅楽の存在を意識したのは、明確に作曲家を志した高校生の頃のことです。その理由は、日本人として音楽に携わるには、音楽上の〝母国語〟を持つ必要があるのではないかと考えたからです。

私たちの音楽の経験は、明治維新以後の欧化政策と、戦後のアメリカンカルチャーの影響を多大に受けています。それは、和楽器の琴や三味線ではなく、西洋音楽中心の学校教育を受けていることからも明らかですし、私自身もピアノやポップスを通じて音楽に目覚め、作曲を始めました。しかし、西洋由来の音楽言語を身につけているだけでは、日本人の音楽家としてのアイデンティティを確立できず、作曲家として個性を発揮することができないのではないかと、常に疑問を感じていました。


鎌倉光明寺にて（撮影：土屋善則）

――確かに、モーツァルトやベートーヴェンの音楽は知っていても、明治以前の日本の音楽については、ほとんど何も知らないのが実状です。日本人として少し不自然なことかもしれませんね。

東野　そうなのです。そんな違和感を抱えつつ、国立音楽大学に入学し、作曲を専攻しました。当時の私は最先端の音楽を求めて、コンピュータによる作曲に取り組んでいましたが、音大で芝祐靖（しばすけやす）先生と宮田まゆみ先生に出会い、本格的に雅楽にふれることになったのです。芝先生は龍笛の名手。800年前から続く雅楽楽師の家柄で、宮内庁楽部の楽師を経て大学で教鞭を執られていました。一方、宮田先生は国立音楽大学の器楽学科ピアノ専攻卒業ですが、国際的に活躍する笙の演奏家で、母校での指導を始められたところでした。

両先生を通じた雅楽との出会いは、私にとって衝撃的な体験でした。日本人の音楽のルーツを知ったというだけではありません。コンピュータミュージックの大きなテーマのひとつは、楽器では出すことのできない音響表現の拡張なのですが、雅楽の楽器はそれをコンピュータなしに軽々と実現しているのです。たとえば笙の音は60キロヘルツまで出ます。その響きの情報量は西洋楽器の比ではありません。電気的に音を拡張させる手法でコンピュータミュージックを作曲する者として、笙に息を吹き込むだけで、素晴らしい音響世界が広がることを知り、本当に驚きました。雅楽という成熟しきった音楽の魅力にふれ、「極められた音」の生命力に気付いたのです。

これがきっかけとなり、雅楽の研究に取り組み、同時に笙の奏者としても活動するようになりました。

好奇心旺盛で物おじしないSFCの雰囲気が心地よい

――音楽大学を卒業してから、SFCの大学院である政策・メディア研究科に入られたのはなぜですか？

東野　音楽を表現方法に選びはしたもの

の、私の命題は、「クリエイターとして何を生み出せるか……」ということです。

そこで、音楽を学ぶカレッジである音大から飛び出し、いろんな学問を学ぶことのできるユニバーシティで、多様な知識を身につけながら、社会的な視点で音楽を俯瞰したり、他の表現分野との接点を探ったりしたいと思ったのです。いろいろな視点と価値観を持っている先生方がいるSFCでは、学際的かつ刺激的な研究ができると聞き、政策・メディア研究科を受験しました。

聞いていた通りに、さまざまなジャンルの先生がいらして、建築や政治の授業を受けたり、コンピュータによるビジュアルアートで、当時最先端の藤幡正樹先生の仕事にふれることができたり、本当に面白い日々でした。

SFCでの私の師は、岩竹徹先生です。当時、先生は、コンピュータミュージックに伝統的な要素を取り入れるという取り組みをされていました。能楽師の観世榮夫さんらと共に能をテーマにした電子音楽を創作していて、私もそこに参加しました。

SFCの大学院の素敵なところは、先生も学生もそれぞれ専門分野を持っているため、上下関係ではなく、並列的にお互いを尊敬、尊重していることです。好奇心旺盛で、新しいことを知りたがるキャンパス全体の雰囲気が心地よかったですね。

後に一緒に仕事をする坂本龍一さんと知り合ったのも、岩竹研究室の物おじしない後輩が坂本さんをキャンパスに呼んだことがきっかけでした。

私の研究テーマは、吹いても吸っても音が出る笙を通じた〝呼吸のさま〟を、現代のテクノロジーでどう活用できるかということでした。修士2年の時に専門家の協力を得てオリジナルのブレスセンサーを開発し、それで得られた呼吸の情報を光やグラフィック映像にして〝呼吸のさま〟、つまり演奏情報をパフォーマンスの場で可視化しました。笙の演奏にビジュアルが連動することは一種の身体表現の拡張なのです。また、コンピュータによって音響を創造することにもこだわっていました。

音楽はどうして社会に必要なのか、なぜ音楽家がいるのか、という根源的な疑問を追求していくことは、音楽家としての私の大きなテーマです。そして、その答えのひとつが〝呼吸〟なのです。呼吸の軌跡はそのまま音楽になります。その軌跡こそが、演奏者の生きざまだと思います。息を吐いて吸う呼吸によって音響



京都国立博物館にて（撮影：世良武史、象牙の笙制作：當野泰伸）

を拡張する笙に、音楽の必然性の一端を感じています。この呼吸と音楽の研究は、後にブリージング・メディアというコンセプトの構築に至りました。

――塾長賞を受賞していらっしゃいます。

東野　1998年のICMC（インターナショナル・コンピュータ・ミュージック・カンファレンス）というコンピュータミュージック学会の作曲コンクールに応募した作品が入選したことで、塾長賞をいただきました。

　この曲は、笙の音と、ウバメガシなどを焼いて作った炭を叩いたりこすったりして出した音をコンピュータ処理し、合成したものです。なぜ炭なのかというと、笙は演奏する前に温めないといい音が出ないのですが、そのときに使うのが火鉢でおこした炭なのです。炭を叩く音を素材にしているというと、冗談のように思われるかもしれませんが、笙と炭の深い関係性を象徴したものです。創作はいたずら心から始まるのかもしれません。



　笙の演奏活動と作曲は今後も並行して進めていくつもりです。また、現在、正倉院復元楽器のための作曲にも携わっています。これは、塾員の大先輩である木戸敏郎氏が国立劇場を中心に30年程前から取り組まれたプロジェクトで、私はここでも研鑽を積ませていただきました。正倉院に納められた古代楽器は楽曲とともにいったんは廃絶してしまいました。しかし、木戸氏により提唱された〝創造する伝統〟の名のもとで千年の時を経て甦った始原の楽器には、雅楽同様に名だたる現代作曲家によって新たな命が吹き込まれているのです。

　振り返れば、ここ数十年は、音楽のみならず、文化文明が大きく進化した時代です。実は、私が演奏させていただいている〝象牙の笙〟は現代の技法を駆使してこそ、古代の夢を叶えられた楽器です。そして、今や情報を中心にさまざまな新しい技術が流転するなか、私はさらに〝質〟を追い求めていきたいと考えています。それは、音楽家として、妙なる音、すなわち妙音を生み出すことだと自負しています。



――最後に塾生へのメッセージをお願いします。

東野　実は家族にも塾員が多く、今回のインタビューを大変喜んでくれました。

　小学校時代に育んだ「創意工夫」の姿勢と自主性は今も私のモットーです。義塾においても、その教育の根底に〝主体的であれ〟という伝統的な精神を感じます。日本の面白みは、世界中の情報、もの、できごとが重なり合っているところにあると思います。その分、情報の意味づけや価値判断を自ら行い、選択、活用する力が必要になるのです。社会で生きていくには、時には従属的にならざるを得ない場面もありますが、根本のところで、自分で考え、行動する主体性を堅持してほしいと思います。

――本日はありがとうございました。